

隠岐院

一名 隠岐物狂

世阿弥作

前

ワキヅレ（男） 人買の男

シテ 狂女

後

ワキ 僧

ヲカシ 里人

シテ 前に同じ

地は 前は山城 後は隠岐

季は 秋

男詞

「かやうに候ふ者は。隠岐の国より出でたる人商人にて候。我此程は都に候ひて。数多の人を買ひ取りて候ふ間。近日に罷り下らばやと存じ候。今日は東寺辺作道のあたりにて人を買はゞやと思ひ候。

シテ次第

「忘れは草の名にあれど。く。忍ぶは人の面影。

詞

「是は鳥羽のあたりに住む女にて候。さても我母に後れ父一人に添ひ参らせ候へば。去年の春御遁世にて候ふ程に。あまりにたづきもなく候へば。都に

知る人の候ふを尋ねて参らばやと思ひ候。

歌

「頃もはや。ふくる鳥羽田の秋の山。く。露も時

雨もせきあへぬ。衣手寒き夜もすがら。寐られぬまゝに思ひ立つ。都はいづくなるらん。く。

シテ詞

「いかにあれなる人。都へはそなたにて候ふか。

男

「是は田舎人と見えて候。いや都へはこなたがよく候ふ程に。こなたへ御出で候へ。

シテ

「あら何ともなや。都へは此道こそ人も上り候へ。

こなたにて有りげに候ふものを。

男「いや／＼あしくあしらひて。声を立てばかなふまじと。髪を取つて引き伏せて。

地「綿轡をむずとはめ。畜生道に落ち行くかと。泣く声だにも出でざれば。心に人間はありそ海の。隠岐の国へと志し。山陰道に急ぎけり。く。(中入)

ワキ詞「是は諸国一見の僧にて候。我国々を廻り候ふが。此程隠岐の国に候ひて。所々を見廻りて候。又承

り及びたる後鳥羽院の御廟に参らばやと思ひ候。誰か渡り候。

ヲカシ「何事を仰せ候ふぞ。

ワキ「是は諸国一見の者にて候ふが。此所初めて一見仕り候。承り及びたる後鳥羽院の御廟を教へて給はり候へ。

ヲカシ「是は思ひもよらぬ事を御尋ね候ふものかな。こなたへ御出で候へ教へ申し候ふべし。又こゝに面白き

事の候。女物狂の候。此御廟へ毎日参り。後鳥羽院の御事を曲舞に作りて歌ひ候ふは。是非もなく面白う候。暫く此所に御座候ひて。御覧ぜられ候へ。

ワキ「懇に承り候。近頃祝着に存じ候。御廟に参り又彼物狂をも見うずるにて候。

シテ「あら遅なはりや今日はまだ。彼御廟へも参らぬよなふ。わらは、都鳥羽の者。父に捨てられかやう

になる。此君の古へも。後鳥羽院と申すなれば。御なつかしさ故郷の恋しさ。君も昔や忍び給ふ。されば古へ都より。送り給ひし言の葉にも。思ひやれ聞かぬを聞きてさびしきは。荒磯波の暁の声。

地「思ひでや。交野の御狩かり暮らし。

シテ「帰る水無瀬の山の端の月。いつか又我也歸りて水無瀬川。

地「鳥羽田の月の秋の山。

シテ「手向の花のかぞいろあらば。

地「遅々たる春にあはせてたべ。此度は。ぬさ取りあへず手向山。く。紅葉の錦春はまた。花衣白妙の。浦風や。浜松が枝の折々に。声そへて沖津浪。海原の。緑の空も春めきて。雁金の如くに。故郷にかへしおはしませ。く。

ワキ詞「夫れ世間の無常は旅泊の夕にあらはれ。生死の轉變は。山林のちまたに知る。

詞「此君の古へも。後鳥羽院と申すなれば。我等が故郷も一しほに。御なつかしき心地して。かたじけなうこそ候へとよ。

シテ詞「不思議やな是なる旅人の口ずさび給ふ言の葉に。後鳥羽院の昔を思ふ君が代の。跡なつかしき詞かな。

ワキ「君も此君は。後鳥羽院とて君の代にも。御名は越えにしすべらぎの。

シテ「すべら代なれど力なく。因果の来る時代とて。

ワキ「兵の乱れに襲はれつゝ。鳥羽田の面を立ちはなれて。

シテ「こゝまでも名を刈田の郷に。

ワキ「露ふるびたる草の庵を。

シテ「見るにつけても昔語を。

二人「思ひぞ出づる西行法師が。讃岐の院の御廟に参りて。

地「よしや君。昔の玉の床とても。く。かゝらん後

は何にかはせんと。よみ置く露の草村や。昔の玉のゆかならん。実にや海人の苦。松の垣ほの八重葎。栄えん君の御宿りに。なるべき事か定めなや。く。

ヲカシ「いかに御僧へ申し候。さきに申しつるは此女物狂の事にて候。いつもの如く鳥羽殿の御事を歌はせて聞かせ申し候ふべし。

ワキ 「いかにも面白う狂はせて御見せ候へ。

ヲカシ 「なふく鳥羽殿の御事を歌ひて御聞かせ候へ。こゝに旅人の御入り候。御聞きありたきと仰せ候。此烏帽子をめして。面白う歌うて見せ申され候へ。

シテ 「実にく是も狂言綺語を以て。讃仏転法輪の誠の道にも入るなれば。いざや歌はん此君の。昔を今にかへす浪の。

地 「隠岐の海の荒磯の。く。新島守は誰やらん。

シテ 「春風に磯山桜咲くのみか。

地 「沖には浪の花ぞ散る。

シテサシ 「承久三年七月八日。時氏鳥羽殿に参じて申しけるは。世はかうにて渡らせ給ひ候ふなり。御出家なくては叶ふまじと。情なく申し上ぐれば。

クセ 「力及ばせ給はずして。やがて御ぐしをおろされたり。綺羅の御姿を引きかへて。衲衣を御身に奉り。御似せ絵を書かせ給ひて。七条の女院に参らせら

る。女院御覧じあへずして。修明門院と。御同車あつて鳥羽殿に。御幸ならせ給ひて。庭上に御車を。立てられければ一院も。御簾をかゝげて。御顔ばかりさし出だして。たゞとくく。御帰りあれとばかりにて。やがて御簾をおろされけり。

シテ「ほどなき一目の御契り。

地「御身も心も燃えこがれ。煙の内の苦しびも。かくやと思ひ知られたり。さらでだに悲しかるべき。

初秋の夕暮に。あはれすゝむる折節もあり。秋の山風吹き落ちて。御身にこそはしみ渡れど。隠岐の海の荒磯の。新島守は誰やらん。御出家の後は。かくても鳥羽殿に。渡らせ給ふべきやらんと。御心やすく。思し召さるゝ処に。時氏又参じて。隠岐の国へ流し奉る。御供には。男女以上五人なり。前蹕の警衛もなく。百官の扈從するものなし。庶人の旅に異ならず。道すがらの御有様。誠にあは

れなりけり。さても此島に。渡らせ給ひて海士の
郡。刈田の郷といふ所に。御座をかまへたりけれ
ば。只海人のすみかに異ならず。昔は蟠洞紫山の
うちにして。春秋を送り迎へて。樂しび尽くる事
なし。

シテ
「今は苦屋の。」

地
「庇蘆垣の。月洩り風もたまらねば。昼もつらし夜
もまた。女御更衣の其拝所もなく。月卿雲客の

拝すもなし。只懷旧の御涙に。まどろませ給ふ。
夜半もなければこの。浪只こゝもとに。立ち来る
心地して。須磨の浦の昔まで。思し召し出でら
るゝ。われこそは。新島守よ隠岐の海の。荒き浪
風心して吹けの。御詠もあはれにて。感涙を押ふ
る。

シテ
「袂も舞の袖。」

地
「汀は浪の。」

シテ「雪をめぐらす。

地「桜衣の。

シテ「袂も袖も。

地「いづれも白妙の白重ね。御僧の衣は墨染の夕の。

色こそかはれよくく見れば。不思議やな親子の。別れて年を故里の。鳥羽の恋塚恋ひ得て。父に逢ふぞうれしき。是も思へば親と子の。契り久しき玉の緒の。長き別れとなりもせで。又めぐり

あふ小車の。所を知るも沖つ波。打ちつれて帰るうれしさよ。